

音楽科

乗 富 章 子
大 滝 菜保美
橋 本 俊 彦

1 音楽科における知識創造とは

生活と音楽のかかわり
BGMの影響
音楽の潜在的価値

音楽性

音楽を理解し、その
おもしろさや美しさ
を感じ取ること

音楽的スキーマ

音楽を表現・鑑賞す
るために必要となる
経験と能力

音楽性の高まり

音楽科と知識創造

音楽科における知識
創造の定義

音楽は、私たちの日常のごく身近なところであって、生活に潤いを与える存在として欠くことのできない価値をもっている。そこには、音楽そのものを積極的に楽しむものだけではなく、BGMなどによって、思考・感情が大きく影響されるという音楽の潜在的価値も含まれている。

学校教育における音楽（以下、音楽科）は、音楽と直接的にかかわる教科学習を中心にして、様々な音や音楽に出会う場である。子どもは、音や音楽を表現及び鑑賞する活動を通して感受する心を日々育てている。その心の発達、音楽的な技能の意欲向上にも深く結びついており、音楽の潜在的価値と融合することで、生涯学習につながる新たな音楽性として生きるものとなる。

音楽科の活動を進めるためには、子ども一人一人が音楽的スキーマをもち、音楽的な視点で友達と積極的にかかわり、ともに表現することでしか得られない気づきや喜びが大切となる。子どもは、音楽的スキーマの個人差を互いに認め合いながらも、新しい刺激として相互に作用させながら活動することで、個々に音楽的スキーマを培ってきている。

子どもは、音や音楽から感じ取ったことを周囲に伝えるために、きれいや美しいといった漠然とした感想から、音色や旋律のある部分がどのような楽曲に即した細かな感想まで、言葉によって多くを表現する。しかし、音楽性は、感じたことを言葉で表す力のほかに、音楽的な感受力や表現の技能、鑑賞の能力も合わせて求めることで高まっていくものである。言葉ではうまく表せないことでも、音楽ならば伝え合うことができるであろう。

知識創造という視点で音楽科をとらえると、次のように考えることができる。子どもは、新しく音や音楽に出会うことで、音楽的スキーマや生活経験から何かしらの感想を抱くことになる。それを互いに言葉や音楽で伝え合う中で、新たな気づきが生まれてくる。子ども一人一人が音や音楽に対して主体的に向き合い、友達の表現するものを意識して聴き、何かを感じ取ることで、新たな知が生まれる。また、その感じ取り方にも個人差があり、互いに表出することを繰り返す中で、音楽性を高めることに結びついている。また、ともに音や音楽を表現する活動は、言葉では伝えることのできない新たな知を生み出している。

以上のことから、音楽科における知識創造を以下のように定義する。

様々な音や音楽に自分なりの感じ方で向き合い 表現や鑑賞の活動を通して 互いにかかわり合う中で 自らの音楽性を高めていく営み

2 知識創造の力を育むために

(1) かかわりの「場」のデザイン

音楽でかかわるとい
うことの意義を意識
する
知識創造を導く三つ
の場と評価を意識す
る

一年次は、以下の二つを考慮して実践に臨んだ。一つは、「音楽でかかわることの意義を子どもに意識させる」ことである。それを意識させることで、音楽に対して自分なりの思いを抱く動機づけとした。もう一つは、「知識創造を導く三つの場と評価を意識する」ことである。かかわりの「場」を「つかむ→もつめる→ひろげる」の活動過程と関連づけて、教師が子どもの思いを引き出し、子ども一人一人の音楽性を高め、培った音楽性を次の活動に広めた。

(2) 「かかわり」の活性化

音楽科のテキスト
(楽譜や範唱や範
奏、CD音源など)

音楽科のテキストを「かかわり」の中心に位置づけ、テキストをひも解くことで個々の音楽性を高めていこうと試みた。具体的な視点をもってテキストに関わることで、互いの表現（言葉によるもの、音楽によるもの）が明らかとなり、新しい刺激を自らの音楽表現に生かそうとする姿につながった。テキストをもとにすることで、音楽がわかるという感覚が身につく、音楽への興味を示しながら、自らの音楽性を高めた。

(3) プロセスの自覚

目標の明確化 段階的な活動計画 音楽的な要素 音楽を特徴付けているリズム、旋律、強弱、速度、音色など 聴き方の工夫	プロセスの自覚を促すために、表現活動では、活動を進める前に、自分あるいは自分たちの目標（到達点）を明らかにさせた。具体的には、楽曲の特徴や音楽的な要素をもとに、何をどのように向上すれば、目標に近づくことができるのかを自覚させた。また、鑑賞活動では、一度目の鑑賞で漠然と楽曲を楽しみ、感じたことがどのような音楽的な要素の影響を受けているのか、友達がなぜ自分と異なる感じ方をしたのかを二度目以降に分析的に聴き取る工夫を取り入れた。いずれも、音楽のしくみを理解することにつながった。
---	--

3 「活用する姿」をめざして

*1 新学習指導要領	音楽科の学習は、音楽を愛好する「心情」と音楽的な「感性」「技能」との三つの視点でとらえることができる。これらが相互に関連することで、子どもの音楽性が高まっていくものと位置づけている。*1
表現側と聴き手の感性と技能	音や音楽を表現するとき、意図をもって表現したのであれば、聴き手にその意図を伝えたいと感じるであろう。そこには、表現側にその意図を上手く表現できるかという感性や技能、同時に、それをどこまで受け止めることができるかという聴き手側の感性や技能が必要となってくる。
自在に表出	表現されたものを聴いて、聴き手が表現側に感じたことや改善点を伝え、さらに表現を工夫する。活用する姿とは、高まってきた感性や技能を用い、楽曲や活動の場面に応じて、音楽的な要素をもって自在に表出（音楽表現および聴き取り）できる姿ととらえる。

(1) 個々の感じ方を相互理解させることで音楽的な感性を磨く

様々な感じ方	子どもは、楽曲に初めて出合ったとき、個々に様々な感じ方をもつ。その感じ方は、漠然としたもの、既習や生活経験のひとつと結びつけて感じ取ったもの、複数の音楽的な要素が関連し合っただけで感じ取ったものである。
感じ方の比較 新たな感性との出会い	これら様々な感じ方が相互理解できるように、活動の中で互いの感じたことを出し合わせ、自分の感じ方と友達の感じ方を比較することで、重なる部分を明らかにさせる。同時に、自分とは異なる新たな感性に出会う場であることを意識させる。また、自分は友達と同じ感じ方だったという共感で終わることのないよう、どの部分でどうしてそのように感じたのかを焦点化することで、より深く感じ取ったものを表出し合える姿につなげる。

(2) 音楽的な要素に着目させることで音楽的な技能を養う

感じ方の言語化	子どもは、上述(1)のような感じ方の相互理解を進めるとき、音楽的に自らの感じ方を友達や教師に伝えるために、「きれい」「楽しい」などの言語を用いる。言語力は、発達段階に応じて向上するが、感じたものを的確に言語化することは大人でも難しい。そこで、音楽的な要素一つ一つに着目した場を設定することで、一つの発言が意味するところを、より具体的に共有させることをめざしたい。
感じた根拠と 音楽的な要素	例えば、低学年ではリズムのみに注目させ、音楽科のテキストを表現したり、鑑賞したりさせることで、リズム感が養われ、リズムに着目して活用する姿が見られるようになるであろう。また、高学年では、音楽科のテキストから、なぜそのような感じ方をしたのかをいくつかの音楽的な要素をもとに分析的にとらえ、楽曲のどの部分で、どんな音楽的な要素が重要な役割を果たしているかを言語化させる。具体的には、ひとつのフレーズについて、友達と同じ感じ方をしたとしても、リズムに着目したものであったり、歌詞から想像したものであったりと、異なる視点もある。音楽的な要素に着目し、その根拠をもとに次の表現に生かす活動は、活用する姿そのものである。

(3) 長期的な取り組み

音楽的な要素が 定着する環境	音楽的な要素について、言葉としての定着を図り、言葉を使いこなせるように高めるために、音楽室に掲示するとともに、音楽的な要素をしばって聴き取る活動場面を設定するなどして、教師が意図的に用いるように心がける。
音楽を愛好する心情	また、友達の感じ方に必要以上に大きな影響を受けてしまったり、いつでも音楽的な要素をもとに分析的に感じ取ったりすると、音楽を愛好する心情は育ちづらい。自らの思いを大切に、音や音楽で表現したり、感じたことを表出したりすることが、大きな価値をもっている。そのため、日ごろから、集団として、個々の感性や技能を理解し合える関係をつくりながら、音楽を楽しむ延長上で、活用する姿を求めていきたい。
理解し合える関係	

4 実践例 —2年—

題材 リズムランドのたんけん

「アイアイ」「ジャングルのたいこ」

(1) 本題材における知識創造

楽曲に合わせて身体表現を楽しみ リズム伴奏づくりや身体表現の工夫を通して リズムへの感性を高めようとする営み

リズムは、音楽を特徴づける音楽的要素の一つとして重要である。低学年では、基本的なリズムをもとに個々の工夫を生かして、様々なリズムを体験的に学ぶことが大切である。そのためには、特徴的なリズムをもつ楽曲に出合わせ、それぞれの曲のよさを感じ取って楽しみながら表現することが必要と考え、上記の知識創造を設定した。

子どもは、全身をつかって音楽を聴き、リズムに合わせて身体を動かしたり、手拍子を打ったりして身体表現を楽しんでいる姿が見られる。それは、楽曲に流れている拍を感じて、自らが感じたままを表現している姿であり、リズムを意識して表現しているわけではない。

そこで、本題材では、まず、楽曲にふさわしいリズムの存在に着目する。楽曲に合ったリズムを加えることで、楽曲そのものがより楽しく表現できることを感じ取る。また、楽しい楽曲の中には、楽しいリズムが含まれていることにも気づくであろう。

さらに、自らが楽しいリズムをつくる活動を通して、どんなリズムでも良いわけではなく、楽曲にはふさわしいリズムがあり、それを味わうことができるであろう。

リズムを楽しむにあたって、リズムの特徴を互いに理解し合うことができるように、楽譜（リズム譜）を用い、リズム譜を見ながら、またはつくったリズムを楽譜に書きながら、リズム打ちができるような活動を取り入れる。リズム譜を見ながら身体表現を楽しむことで、より具体的に小節や音符、休符をもとにした話し合いができる。また、リズムづくりの工夫をポイントしぼって説明することにつながる。

グループ活動を通して、友達の表現するものを聴き、自らの感じ方との相違点を明らかにし、共感したり新しい感じ方を理解したりすることで、リズムへの感性を高めていく。その際、リズム譜を手がかりにすることで、自ら表現したリズムと、楽しいリズム伴奏との関連について、楽譜として理解を深めていくことにつながる。

(2) 知識創造の力を育むために

① かかわりの「場」のデザイン

楽しくリズム表現が行われるように、グループ活動を数多く取り入れる。自らのリズム表現を友達に見てもらい、友達の表現を見るなかで、ともにリズム表現する楽しさが増すであろう。そのうえで、表現しているリズムの違いに気づき、注意深くリズムを感じ取った言動につなげたい。

また、バッテリー奏を取り入れ、同じリズムをみんなで表現する楽しさから、掛け合いのリズムを味わわせたい。上のパートと下のパートが合わさって、はじめて一つのリズムが構成されるバッテリー奏では、友達と合わせる難しさと楽しさを感じ取ることができる。

② 「かかわり」の活性化

かかわりの中心に、音楽科のテキストとしてのリズム譜を位置づけ、表現されたものがリズム譜のどの部分なのかを明確にすることで、リズム譜をもとに互いに表現したり、歌唱に合わせてリズム表現したりする活動につなげたい。友達と同じリズム表現だったという場合でも、リズム譜を手がかりにすることで、視覚的にも理解を深めることにでき、似ているけれど異なるリズムの差異も明らかとなるため、感じたことの話合いも活発に行える。

③ プロセスの自覚

リズム伴奏づくりでは、教科書にあるリズムを掲示し、そのリズムを自らがつくったリズムをリズム譜に書き示し、双方を比較して表現することで、より楽しいリズム伴奏ができるようにさせる。また、つくったリズム譜を活動の姿として残し、リズム譜の移り変わりも意識させたい。その際、楽譜化することに戸惑うグループには、音符と休符の関係がわかるように見せながら楽譜化し、楽譜と表現の関連を習得させたい。

(3) 「活用する姿」をめざして

① リズムの感じ方を相互理解させる

本題材では、リズムを表現する楽しさをあらためて感じ取らせたい。簡単なリズムから、4小節つながったリズムパターン、上下に分かれたリズムが組み合わさった難しいものまで、ステップを設けて、様々なリズムの楽しさを感じ取らせたい

そのため、一人一人の感じ方や考えが表出しやすくなるように、少人数でのグループ活動を取り入れる。話し合いとリズム表現の試行錯誤を繰り返す中で、個々の様々な感じ方を相互に理解し、少人数グループとしての一つの感じ方にまとまっていくことを期待したい。

また、どうしてそう感じたのかを出し合い、どのリズム（部分）からそう感じるに至ったのかを明らかにすることで、感じたものと楽譜が結びつくような意識をもたせる。また、楽しいと受け止める感じ方の個人差も理解しつつ、その影響を受けて、自らの新しい感じ方の視点にもつなげたい。

② リズム（音楽的な要素）の重要性に着目させる

本題材は、リズムという音楽的な要素を注目して、楽しいリズム伴奏という視点で活動を進める。具体的には、リズム譜を見ながら表現することに慣れさせ、自分が楽譜のどこを演奏しているかを理解しながらリズム表現を楽しませたい。また、リズム伴奏づくりでは、リズム譜をもとにして、どの部分をどういうふう工夫したのか、できるだけ理由をつけて発表させる。また、プロセスの自覚とも重なるが、工夫した足あとをたどり見比べることで、変更した根拠をもとに言葉で表わしやすくなることを期待したい。

(バッテリー奏での二つのリズムをそれぞれ上のリズム、下のリズムとする。) リズム伴奏づくりは、子どもにとって、はじめての経験である。そこで、できるだけ簡単につくることができるように、リズムをフレーズの一部としてとらえ、1小節分の上パートについてのみ工夫することを課題とする。たとえば、「アイアイ」の1フレーズ分の中の1小節だけの上のリズムを変える。他は、教科書と同じリズムである。

バッテリー奏を行う際は、教材曲に合わせて歌いながら表現することが難しい場合も考えられる。そこで、1パートを一人で受け持つよりも、1パートを複数人で受け持つことができるようにと考え、グループの構成人数を6人と設定した。

(4) 学習計画（総時数8時間）

主な授業デザイン	モード	知識創造の流れ
1 音楽に合わせて身体表現をする ・ピアノのテンポに合わせて身体表現をする ・動きの理由を考える ・歌のリズムとスキップのリズムを確認する	表出 共有 有意味化	・音楽が速い時は 速く動きたくなるよ ・はずんだリズムだからスキップしたよ ・休ふだから 動きを止めたよ ・スキップのリズムが歌の中に入っているね
2 リズムパターンを覚える ・リズム譜を見ながらリズム打ちをする	想起	・1年生のときにやったことがあるよ ・音符を見ながらリズム打ちができたよ
3 「アイアイ」をきいてリズムを表現する ・歌詞に合わせて手拍子をする ・拍子と歌詞のリズムをバッテリー奏する ・歌詞の呼応をバッテリー奏する 4. 「アイアイ」を歌う ・拍子の手拍子に合わせて歌う ・2グループに分かれて歌詞の呼応のリズムを加えて歌う	表出 共有 表出 有意味化	・歌詞と同じリズムを叩けたよ ・2つのちがうリズムを同時に演奏することを バッテリー奏というんだね ・2つのリズムを合わせるのは むずかしい ・ピタッと合うと とっても楽しいよ ・リズムのかけ合いって おもしろいね ・手拍子を入れながら歌うと 歌いやすいね ・拍子と「アイアイ」の歌詞のリズムはいっしょだよ ・手拍子を入れると 歌がとっても楽しくなるね

<p>5. 「アイアイ」のリズム伴奏を練習する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズム譜を見ながら手拍子で表現する (上下それぞれを練習してから上下に分かれる) ・「アイアイ」の歌にバッテリー奏を合わせる <p>6. リズム伴奏をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自でリズムを考える ・グループで話し合いながらリズム伴奏をつくる ・つくったリズムは楽譜に書きあらわす ・つくったリズムを歌に合わせる <p>7. つくったリズム伴奏を発表する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこをどんなふうに変えたかをリズム譜をもとに話す ・工夫したところ(聴いてほしいところ)を伝える <ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせてバッテリー奏をする ・他のグループ発表を聴く 	<p>有意味化 活用</p> <p>共有</p> <p>活用</p> <p>表出</p> <p>共有</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム伴奏は 歌詞とはいっしょではないんだ ・これもバッテリー奏になっているね ・リズム伴奏が叩けるようになったよ ・足と手を使って一人でもできたよ <ul style="list-style-type: none"> ・アイアイに合う楽しいリズムをつくりたい ・6人グループでリズムをつくるよ ・どの部分のリズムをつくるかな ・リズムを変えると 楽しさも変わったよ ・やっぱりはずんだリズムが合うね <ul style="list-style-type: none"> ・はじめは たくさん打つリズムをつくったんだけど 歌に合わない感じがしたので 音符の数を減らしました ・下パートと上パートの追いかけてこが 楽しくなるように工夫しました ・つくったリズム伴奏が歌に合っていて 楽しいアイアイになっていました ・簡単なリズムだけど 曲にとっても合っていたよ
<p>8. 「ジャングルのたいこ」を表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メロディーを歌う ・音楽に合わせてリズム打ちをする ・打楽器を選び リズム打ちをする <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな楽器を使ってリズム打ちをする <ul style="list-style-type: none"> ・打楽器を使ってバッテリー奏をする 	<p>表出</p> <p>共有</p> <p>活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい曲だね ・リズム譜に合わせてリズムを表現できたよ ・打楽器を使ってバッテリー奏をやってみようよ ・タンブリンとカスタネットのリズム伴奏がおもしろいよ ・打楽器は リズム伴奏に似合うものと合わないものがあるようだ ・選んだ2つの楽器の組み合わせも大切だね ・打楽器のバッテリー奏を加えると音楽が楽しくなったよ

(5) 授業の実際と考察

本題材では、いろいろなリズムパターンを身体で表現して楽しみ、また楽曲に合った楽しいリズムをつくることで、リズムへの感性が高まることをめざした。以下、子どもが注意深くリズムを感じ取る様子が見られたか、リズムの特徴を音楽的につかみリズムを工夫することができたかを、それぞれの視点で考察する。

① リズムの楽しさを感じながら表現する

低学年の子どもにとって、リズム譜を見ながら表現することは難しいのではという心配があった。音符を見せることで、リズムは難しいものなのか、音楽そのものへの抵抗感につながらないかというものである。しかし実際には、リズム譜(資料1)は、リズム遊びを楽しむ延長上でその手がかりとなっており、友達といっしょに同じリズムを表現するためにも、リズム譜は必要なものという感覚でリズム表現を楽しんでいた。また、リズム譜をもとに、どの音符でみんなのリズム打ちが合わなくなったかを説明する姿が見られた。

資料1 リズムの一例

きる」という条件も付け加える。その結果、次に挙げる二つの例は、グループで理由をつけて発表した例である。グループ内での話し合いの中から、よりよいリズムへと変化していく様子がわかる例である。

＜アイアイにあったリズムをつくろう＞

資料3 課題のリズム譜

＜グループⅠのリズム（資料4）＞

このグループでは、最初は⑦の小節にリズムをあてはめて練習していた。理由は、リズム譜を見ると、⑦⑧は歌詞とリズムがいっしょだから変えるのは⑨しかないということであった。何回か歌いながら練習していくうちに、リズム譜と同じように3小節（⑦⑧⑨）を同じリズムに変えたほうがたたきやすいのではないか。ということになり、1小節だけではなく、3小節を同じリズムにかえたいと申し出てきた。発表時の理由は、「1小節だけ変えるより、3小節かえたほうがたたきやすい。」ことと、「3小節かえたほうが楽しい感じがした。」ということであった。このグループのリズム工夫は、リズム譜を見て考え、工夫が変化していった例である。

資料4 グループⅠの工夫したリズム

＜グループⅡのリズム（資料5）＞

最初は⑦のリズムを変えた。ところが、⑦をかえると、リズムがグループでそろいにくかったので、今度は、⑧をかえた。今度は、歌詞がたくさんあって歌いながら手拍子をするとう失敗しやすかったことから、残ったところが⑨だったということであった。発表時の理由は、「リズム譜をみて四分音符だけでなく八分音符をいれてみるとかっこいい感じがした。」「⑨の場所が一番歌いながらたたきやすかつ

資料5 グループⅡの工夫したリズム

た。」である。このグループでは、課題設定のルール「歌いながらできる」を活かした結果である。曲のリズム伴奏として難しすぎない、楽しんでできるというレベルを考えると「歌いながらできる」ことが子どもにとって大きな目安となった例である。

イ 打楽器を取り入れたリズム表現を通して

「ジャングルのたいこ」では、「アイアイ」で経験したバッテリー奏で楽器を使って合わせることを行った。まず、楽器を選ぶことから始めた。コンガ、ギロ、トライアングル、カスタネット、ウッドブロック、鈴、カウベル、タンバリン、マラカスの9種類の楽器の中から各グループで楽器を選んだ。コンガとトライアングルを選んだグループでは、試行錯誤を繰り返していたが、トライアングルの音が伸びるためにリズム譜どおりにいかないということで、トライアングルをカスタネットに変えていた。鈴を選んだグループでも、同じように鈴の音だとリズムがはっきりしないという理由から楽器を変えていた。

また、バッテリー奏の下のリズムを音の大きさを考えているグループもあった。下のリズムを鳴らす楽器を、二つ選んできた楽器で比べ、大きな音がでるものにしていく。これは、下のリズムがはっきり聞こえると上のリズムがたたきやすいという理由からである。

このように、リズムがはっきり聞こえるように楽器を選び、ベースとなる下のリズムをさらにはっきりさせようという様子が見られるようになったことから、楽器を使うことにより手拍子でしていた時よりも表現が広がり、よりリズムを意識したリズム伴奏ができたと考えられる。

(6) 成果と今後の課題

本題材では、グループ活動を通して、リズムに対する個々の感じ方を相互に理解し合い、友達といっしょにリズムを表現したり、リズム伴奏をつくったりする楽しさを味わうことができた。また、リズムそのものが楽曲にとって、とても重要な存在であることを認識する機会となった。拍を感じる基本となるリズムと旋律に含まれるリズム、そこに新たに追加されるリズム伴奏としてのリズムが重なり合っ、楽曲特有の楽しさにつながっていることを、2年生なりに感じ取ることができたのではないかと思う。表現活動の中心にリズム譜に用いたことも、みんなでリズムを楽しみ、リズム伴奏づくりを円滑に進めることに有効であったといえる。耳で聞いただけでは、合っているか否かが分かりづらく、どこが間違っているのかも理解しづらいだろうが、リズム譜上で音符を指さして話ができることで、互いの理解が深まっていった。

本実践を通して、めざす知識創造が実現するためには、2つの課題が見えてきた。

一つめは、課題設定である。グループでの話し合いの手順、発表する時のルール、発表を聴く時のルール、課題と手順やルールなどの指示が多すぎたため、子どもが混乱し何をすればよいのかが、わからなくなってしまった。特に課題設定については、1小節を選択し、そのリズム工夫を課題とした。しかし、グループIのように、3小節を同じリズムに変えるグループもできた。課題やルールが多く混乱しているグループが多かった状況から、特に課題設定が子どもの状態に則していたかを考察した。グループで考えなければいけないことが、⑦⑧⑨の一つを選ぶことと、リズムを考えることの二つになってしまった。リズム伴奏づくりは、子どもたちにとって初めての経験であることと、リズム工夫だけに着目させることを考え、⑦⑧⑨の中から一つを選ぶのではなく、3小節を同じリズムに変えるというシンプルな課題設定でもよかったのではないかという反省が残った。

二つめは、音楽的な要素の言語化である。「理由をつけて発表する」というルールでは、言葉として表わすことができなかつたため、発言の共有ができずに予定した話し合いに至らないグループが多かった。そこで、教師が子どもたちの話を聴いて理由に導くよう手立てをとった。そうすることにより、ほとんどのグループでリズムの理由づけができた。これらの反省から、音楽的要素の位置づけを明確化するために、教師が意識的に言葉を選ぶことや、教室内に音楽的な要素を表す言葉や音符を掲示し、子どもが常に使える環境をつくる必要があると考える。